

Coq の論理

1 プログラムの型付け

型 $\tau, \theta ::= \text{nat} \mid \mathbb{Z} \mid \dots \mid \theta \rightarrow \tau \mid \tau \times \theta$ データ型, 関数型, 直積

型判定 $\Gamma \vdash M : \tau$ $\Gamma = x_1 : \tau_1, \dots, x_n : \tau_n$ という仮定のもとで, M が型 τ をもつ.

型付け規則 Coq の式は以下の型付け規則によって型付けされる.

変数	$\Gamma \vdash x : \tau$ ($x : \tau$ は Γ に含まれる)	定義	$\frac{\Gamma \vdash M : \theta \quad \Gamma, x : \theta \vdash N : \tau}{\Gamma \vdash \text{let } x := M \text{ in } N : \tau}$
抽象	$\frac{\Gamma, x : \theta \vdash M : \tau}{\Gamma \vdash \text{fun } x : \theta \Rightarrow M : \theta \rightarrow \tau}$	不動点	$\frac{\Gamma, f : \theta \rightarrow \tau, x : \theta \vdash M : \tau}{\Gamma \vdash \text{fix } f (x : \theta) := M : \theta \rightarrow \tau}$
適用	$\frac{\Gamma \vdash M : \theta \rightarrow \tau \quad \Gamma \vdash N : \theta}{\Gamma \vdash M N : \tau}$	直積	$\frac{\Gamma \vdash M : \tau \quad \Gamma \vdash N : \theta}{\Gamma \vdash (M, N) : \tau \times \theta}$
	射影		$\Gamma \vdash \text{fst} : \tau \times \theta \rightarrow \tau \quad \Gamma \vdash \text{snd} : \tau \times \theta \rightarrow \theta$

型付けの例

$$\frac{\frac{\frac{\Gamma, x : \text{nat} \vdash S : \text{nat} \rightarrow \text{nat} \quad \Gamma, x : \text{nat} \vdash x : \text{nat}}{\Gamma, x : \text{nat} \vdash S x : \text{nat}} \text{適用}}{\Gamma \vdash \text{fun } x : \text{nat} \Rightarrow S x : \text{nat} \rightarrow \text{nat}} \text{抽象}}{\Gamma \vdash (\text{fun } x : \text{nat} \Rightarrow S x) O : \text{nat}} \text{適用} \quad \Gamma \vdash O : \text{nat}}$$

2 命題論理

論理式 論理式は以下の結合子から定義される.

$P, Q ::=$	$\text{True} \mid \text{False}$	定数
	A	論理変数
	$P \supset Q$	含意
	$P \wedge Q$	論理積
	$P \vee Q$	論理和

否定はないが, 便宜のために $\neg P = P \supset \text{False}$ とおく.

導出規則 自然演繹体系では真の論理式は以下の規則より導出される.

Δ を論理式の集合とする. True は常に Δ に含まれる.

公理	$\Delta \vdash P$ (P は Δ に含まれる)	\wedge 導入	$\frac{\Delta \vdash P \quad \Delta \vdash Q}{\Delta \vdash P \wedge Q}$
\supset 導入	$\frac{\Delta, P \vdash Q}{\Delta \vdash P \supset Q}$	\wedge 除去	$\frac{\Delta \vdash P \wedge Q}{\Delta \vdash P} \quad \frac{\Delta \vdash P \wedge Q}{\Delta \vdash Q}$
\supset 除去	$\frac{\Delta \vdash P \quad \Delta \vdash P \supset Q}{\Delta \vdash Q}$	\vee 導入	$\frac{\Delta \vdash P}{\Delta \vdash P \vee Q} \quad \frac{\Delta \vdash Q}{\Delta \vdash P \vee Q}$
背理法	$\frac{\Delta, \neg P \vdash \text{False}}{\Delta \vdash P}$	\vee 除去	$\frac{\Delta \vdash P \vee Q \quad \Delta, P \vdash R \quad \Delta, Q \vdash R}{\Delta \vdash R}$

恒真式 命題論理の恒真式は *True* だけを仮定して導出できる式である。

例えば, $P \supset P \wedge P$ や $P \supset (P \supset Q) \supset Q$ は恒真式である。それぞれの導出を以下に示す。

$$\frac{\frac{P \vdash P \quad P \vdash P \quad (\text{公理})}{P \vdash P \wedge P} (\wedge \text{導入})}{\vdash P \supset P \wedge P} (\supset \text{導入}) \quad \frac{\frac{P, P \supset Q \vdash P \quad P, P \supset Q \vdash P \supset Q \quad (\text{公理})}{P, P \supset Q \vdash Q} (\supset \text{導入})}{\vdash P \supset (P \supset Q) \supset Q} (\supset \text{導入})$$

3 命題と型の対応

カーリー・ハワード同型により, 命題論理と型理論 (型付 λ 計算) が対応している。

具体的には, 以下のような対応が見られる。

命題 (論理式)	型
証明 (導出)	プログラム
仮定 Δ	型環境 Γ
\supset	\rightarrow
\wedge	$*$

導出規則と型付け規則も基本的には 1 対 1 で対応している。それぞれの体系を少し修正すると以下の定理がなりたつ。

定理 1 (Curry-Howard 同型) ある同型 $\langle _ \rangle : \text{命題} \rightarrow \text{型}$ が存在し, 任意の Δ と P について, 導出 Π より $\Delta \vdash P$ が示せるならば, Π からプログラム M が作れ, $\langle \Delta \rangle \vdash M : \langle P \rangle$ 。また, 任意の Γ, M, τ について型理論で $\Gamma \vdash M : \tau$ が導出できれば, 命題論理において $\langle \Gamma \rangle^{-1} \vdash \langle \tau \rangle^{-1}$ が導出できる。

修正の内容は二種類ある。

まず, 上の不動点の規則は矛盾を生んでしまう。具体的には, $\theta = \text{True}$ と $\tau = \text{False}$ にすると, 以下の導出が可能になる。

$$\frac{\Gamma, f : \text{True} \rightarrow \text{False}, x : \text{True} \vdash f x : \text{False}}{\Gamma \vdash \text{fix } f (x:\theta) := f x : \text{True} \rightarrow \text{False}}$$

しかし, Coq の本当の不動点の規則はさらに f が x より小さな引数に適用されることを求めているので, この矛盾が実際には起きない。本当の規則が複雑なのでここには書かない。

もう一つは, 背理法に対する規則は Coq の型体系にはない。それは Coq は通常の命題論理 (古典論理) に基づいているのではなく, それと少し異なる直感主義論理に基づいているからである。もしも命題論理を直感主義にするならば, 背理法を以下の矛盾という規則に置き換えればいい。

$$\text{矛盾} \quad \frac{\Delta \vdash \text{False}}{\Delta \vdash P}$$

要するに, 矛盾 (*False*) が証明できれば, 何でも証明できるようにする。古典論理では背理法よりそれが導出できるが, 背理法のない直観主義論理ではこの新しい規則が必要になる。

Coq の論理はこの直観主義論理とちょうど一致する。メリットとして, 全ての証明が計算的な意味を持つ—証明は関数である。

しかし, 逆に Coq の中で古典論理の証明をしたいときもある。ほとんどの定理は背理法なしで証明できるものの, 証明できない定理もある上, 単に背理法が便利なきもある。そのとき, Coq の論理に新しい公理として以下の規則を導入すればいい。

$$\neg\neg\text{除去} \quad \Delta \vdash \neg\neg P \supset P$$

この公理と抽象を組合せると背理法が導出可能になる。

4 Coqで定理の証明

前述の Curry-Howard 同型のおかげで、Coq の中で直接に命題を書くことができる。その型を満すプログラムが見付かれれば、定理になる。

変数宣言 まずは、準備として論理変数の宣言を行う。Section というコマンドを使うと、局所的な論理変数が宣言できるようになる。宣言自体は Variables コマンドを使う。そして、宣言範囲が終ると End コマンドでセクションを閉じる。

```
Section Koushin.  
  
Variables P Q : Prop.  
P is assumed  
Q is assumed
```

論理式自身は型であると先に説明したが、通常の型の型だった Set と異なり、論理式の型は Prop になる。普段はあまり影響はないが、区別すると便利なことができる。

命題と証明プログラム

まず、前の二つの恒真式を証明してみよう。
2つ目は関数適用だけなので、簡単にできる。

```
Theorem modus_ponens : P -> (P -> Q) -> Q.      (* 名前を付けなければならない *)  
Proof (fun p pq => pq p).  
modus_ponens is defined
```

```
Print modus_ponens.                               (* 実際には関数定義と変わらない *)  
modus_ponens = fun (p : P) (pq : P -> Q) => pq p  
              : P -> (P -> Q) -> Q
```

しかし、一つ目ではデータの直積ではなく、命題の論理積を使ったので、作り方を調べなければならぬ。

```
Locate "\".                                       (* 論理積の定義を調べる *)  
Notation          Scope  
"A \ B" := and A B : type_scope  
Print and.  
Inductive and (A B : Prop) : Prop := conj : A -> B -> A / B
```

conj が論理積の証明の構成子だとわかる。

```
Theorem and_self : P -> P \ P.  
Proof (fun x => conj x x).  
and_self is defined
```

作戦 (tactic) の利用

上のように、プログラムを与えることで定理を証明することができる。しかし、複雑な定理になると、途中で出て来る命題が煩雑になり、正しいプログラムを書くのが至難の技になる。

通常は、定理は関数と違う定義方法を使う。証明モードに入り、作戦 (tactic) によって証明を構築していく。各 tactic は導出規則と対応している。

```
Theorem modus_ponens' : P -> (P -> Q) -> Q.      (* 異なる名前にする *)  
1 subgoal                                         (* 証明の状況が表示される *)  
  
P : Prop  
Q : Prop
```

```
=====
P -> (P -> Q) -> Q
```

Proof.

```
intros p pq.
```

(* 仮定に名前を付ける (抽象) *)

```
p : P
pq : P -> Q
```

```
=====
Q
```

```
apply pq.
```

(* 目標を関数 pq の結果とみなす (適用) *)

```
p : P
pq : P -> Q
```

```
=====
P
```

```
assumption.
```

```
Proof completed.
```

Qed.

modus_ponens' is defined

実際の証明をもう一度みよう.

```
Theorem modus_ponens' : P -> (P -> Q) -> Q.
```

Proof.

```
intros p pq.
```

```
apply pq.
```

```
assumption.
```

Qed.

and_self について同じことをする.

```
Theorem and_self' : P -> P /\ P.
```

Proof.

```
intros p.
```

```
1 subgoal
```

```
p : P
```

```
=====
P /\ P
```

```
split.
```

```
2 subgoals
```

(* 論理積の導入 (∧ 導入) *)

(* 前提が二つある *)

```
p : P
```

```
=====
P
```

```
subgoal 2 is:
```

```
P
```

```
assumption.
```

(* 順番に解いていく *)

```
1 subgoal
```

```
p : P
```

```
=====
P
```

```
assumption.
```

```
Qed.  
and_self' is defined
```

```
Print and_self'.  
and_self' = fun p : P => conj p p  
      : P -> P /\ P
```

(* 実際の定義は前と変わらない *)

セクションを閉じる

```
End Koushin.
```

```
Print and_self.  
and_self =  
fun (P : Prop) (x : P) => conj x x  
  : forall P : Prop, P -> P /\ P
```

(* 必要な変数が定義に挿入される *)

否定に関する定理

証明状態の表示が作戦を読みにくくするので、これ以降は省くことにする。自分で Coq の中で実行して、確認して下さい。

```
Section Negation.
```

```
Variables P Q : Prop.
```

```
Theorem DeMorgan : ~ (P \/ Q) -> ~ P /\ ~ Q.
```

```
Proof.
```

```
  unfold not. (* ~ の定義を展開する *)  
  intros npq.  
  split; intros q. (* ; で両方の subgoal について intros q を行う *)  
    apply npq.  
    left. (* v 導入の左を使う *)  
    assumption.  
  apply npq.  
  right.  
  assumption.
```

```
Qed.
```

```
DeMorgan is defined
```

しかし、双対的な定理 $(\neg(P \wedge Q) \supset \neg P \vee \neg Q)$ は直観主義論理ではなりたたない。Hypothesis コマンドによって二重否定の除去を仮定すると証明できる。ちなみに、Hypothesis コマンドは Variables の異名でしかなくて、動作は全く同じである。

```
Hypothesis classic : forall P, ~~P -> P. (* 任意の P について *)  
classic is assumed
```

```
Theorem DeMorgan' : ~ (P /\ Q) -> ~ P \/ ~ Q.
```

```
Proof.
```

```
  intros npq.  
  apply classic.  
  intro nnpq.  
  apply npq.  
  clear npq. (* 不要な仮定を忘れる *)  
  split; apply classic.  
    intros np.  
    apply nnpq.  
    left.  
    assumption.  
  intros np; apply nnpq; right; assumption.
```

```
Qed.
```

DeMorgan' is defined

End Negation.

仮定を破壊する

Coq の帰納的データ型に対して、値を破壊しながら中身を取り出すという tactic が便利である。直接に対応する論理規則はないが、当然ながら他の論理規則から同じ結果を導くことは可能である。

Section Destruct.

Variables P Q : Prop.

Theorem and_comm : P /\ Q -> Q /\ P.

Proof.

intros pq.

destruct pq as [p q].

(* 中身を取り出す *)

split; assumption.

(* 一気に終わらせる *)

Qed.

and_comm is defined

Theorem or_comm : P \/ Q -> Q \/ P.

Proof.

intros pq.

destruct pq as [p | q].

(* 場合が二つある *)

right; assumption.

left; assumption.

Qed.

or_comm is defined

End Destruct.

論理規則と tactic の対応

論理規則	型付け規則	作戦
公理	変数	assumption
⊃ 導入	抽象	intros <i>h</i>
⊃ 除去	適用	apply <i>h</i>
矛盾		elimtype False
∧ 導入	直積	split
∧ 除去	射影	destruct <i>h</i> as [<i>h</i> ₁ <i>h</i> ₂]
∨ 導入	直和	left, right
∨ 除去	match	destruct <i>h</i> as [<i>h</i> ₁ <i>h</i> ₂]

練習問題 4.1 以下の定理を Coq で証明せよ。

Section Coq2.

Variables P Q R : Prop.

Theorem imp_trans : (P -> Q) -> (Q -> R) -> P -> R.

Theorem not_false : ~False.

Theorem double_neg : P -> ~~P.

Theorem contraposition : (P -> Q) -> ~Q -> ~P.

Theorem and_assoc : P /\ (Q /\ R) -> (P /\ Q) /\ R.

Theorem and_distr : P /\ (Q \/ R) -> (P /\ Q) \/ (P /\ R).

Theorem absurd : P -> ~P -> Q.

End Coq2.